

歷史學要

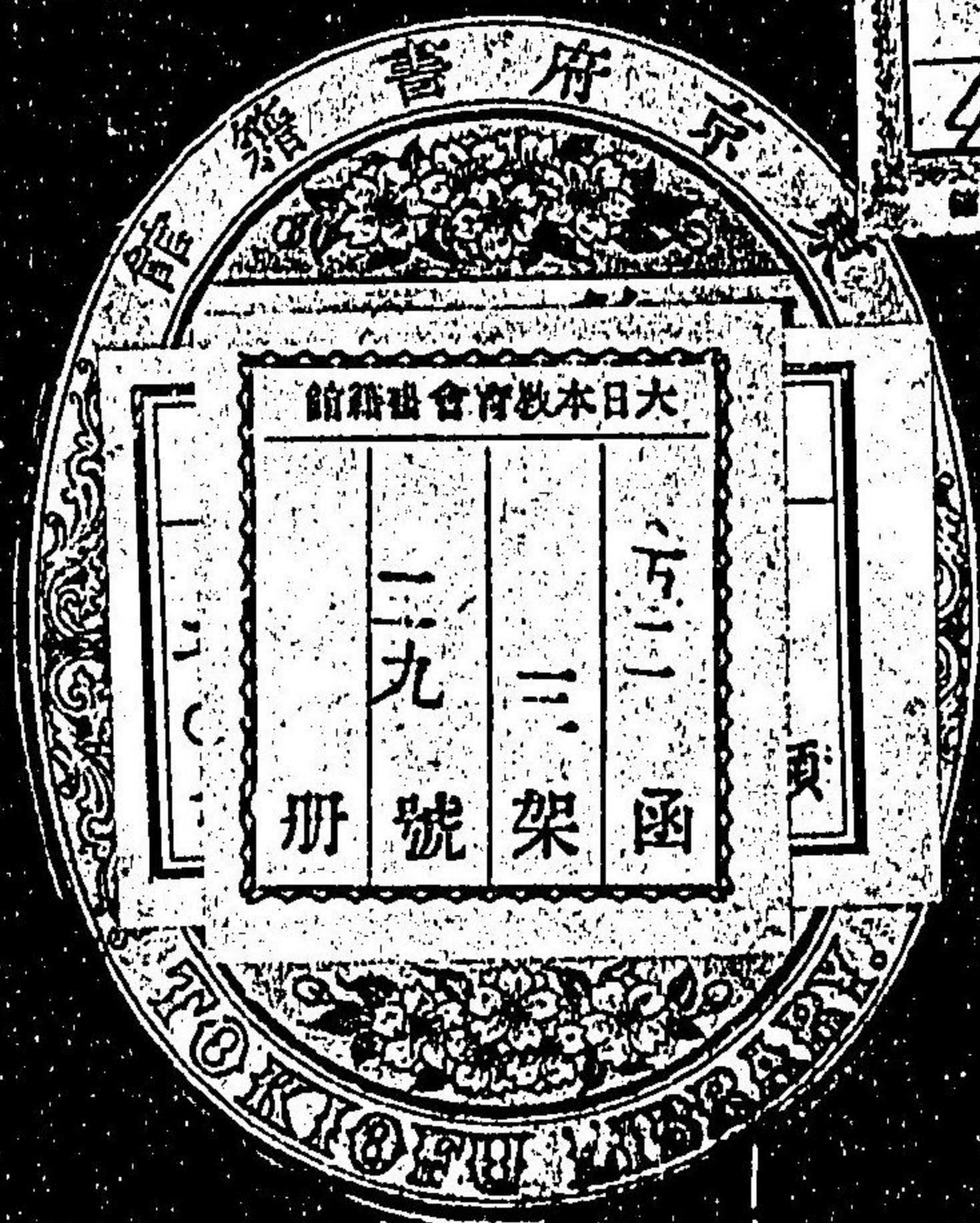
原田由己編輯

二十
大尾

特31

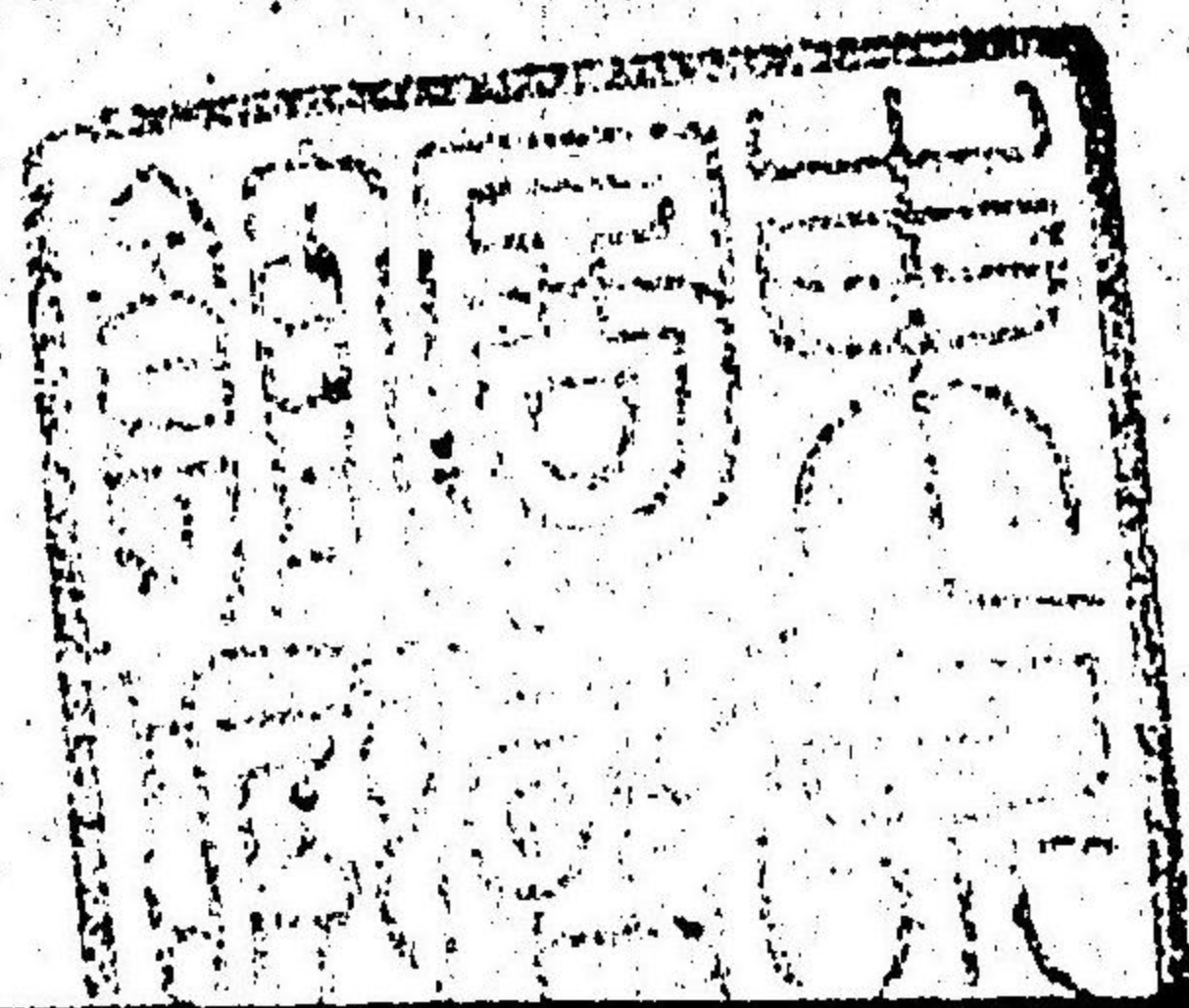
696

41



特31

696



歴史攬要卷之二十

原田由巳 編次

○帝由松 福王常洵ノ子、神宗ノ孫ナリ、毅宗ノ社稷ニ殉フヤ、南京ノ部官會議シ一王ヲ推戴シテ、賊ヲ討ニス、時ニ由松賊ヲ避ケテ舟淮安ニ次ス、遂ニ立テ、帝爲ス、○五月、帝位ニ即キ、兵部尚書史可法、戸部尚書高弘圖、鳳陽總督馬士英等ヲ召シ、閣ニ入テ事ヲ辨セシム、可法請テ師ヲ江北ニ督ス、士英固ヲ專ラニス、○淮揚徐泗鳳壽滁和ノ四鎮ヲ設ケ、劉清澤、高傑、劉良佐、黃得功ヲ

歴史攬要

卷之二十

明○帝由松

一

以テ之ヲ轄セシム、得功固ヨリ忠勇、功ヲ河北ニ建ツ、傑ハ舊ト賊將、驍名アリ、翻山鶴ト稱ス、陝督孫傳庭傑ヲシテ白廣恩ト與ニ前鋒タラシム、二將相下ラス、軍遂ニ潰ス、傑又得功ト淮揚ヲ争ヒ、戦テ勝タス、太僕少卿萬元吉江北ノ軍ヲ監シテ之ヲ和解ス、元吉得功ニ書ヲ貽テ共ニ力ヲ王室ニ戮サンコトヲ期ス、得功自ラ他ナキヲ明シ、各鎮ヲ聯絡シ、勇ヲ鼓シテ賊ヲ殺サント言フ、元吉得功カ書ヲ以テ馳テ傑等ニ示シ、始テ兵ヲ罷ソ、傑ヲ史可法カ標下ニ隸シテ、前鋒總兵官トナス、○吳三桂ヲ薊國公ニ封シ、以テ殺賊ノ功ヲ賞ス、史可法馬士英ノ奏ニ從フ

ナリ、○應天巡撫左懋第ニ兵部侍郎ヲ加ヘテ、河北ヲ經理セシメ、僉都御史程世昌ニ命シテ、應天ヲ巡撫セシム、時ニ山東河北多ク偽官ヲ殺シ響應ス、○馬士英奏シテ欽案阮大鍼ヲ薦ム、冠帶ヲ賜テ陛見ス、舉朝大ニ駭ク、高弘圖九卿ニ下シテ會議セント請ヒ、呂大器等連疏シテ之ヲ糾ス、レ氏聽カス、大鍼召對旨ニ稱フ、竟ニ用井ラレテ江防兵部侍郎トナル、○左都御史劉宗周御史李模等疏シテ時事ヲ論ス、其辭痛切ナリ、或ハ馬士英ノ爲ニ尼ソラレテ上ツルヲ得ス、或ハ報聞スルノミ、○湖廣巡按御史黃澍、承天守備大監何志孔ト同ク馬士英カ奸貪不

法ヲ糾ス、士英賂ヲ福邸ノ舊閣田成張執中等ニ行フ、帝
 遂ニ兩閣ノ言ニ惑ヒ、即チ士英ヲ諭留ス、澍復タ連疏シ
 テ之ヲ争フ、帝屢ク諭シ澍ヲ趣カレテ楚ニ赴カレム、○
 六月、清人檄ヲ傳ヘテ濟寧ニ至ル、山東清ニ降ル、李建泰
 謝陞馮銓降り、ミナ清ノ内院大學士トナル、○十月、清ノ
 攝政王多介來書ヲ史可法ニ致シ、江南更ニ天子ヲ立ツ
 ルトヲ詰責ス、畧ニ曰、國家ノ熱都ヲ定ルハ、之ヲ闢賊ニ
 得ルモノニシテ、之ヲ明朝ニ得タルニ非ス、賊明朝ノ廟
 主ヲ毀チ、辱先王ニ及フ、國家征繕ノ勞ヲ憚カラス、悉ク
 敵賊ヲ索シ、代テ為ニ恥ヲ萬世ニ雪ク、闢賊但明朝ノ寇

慝ヲナシ、未タ嘗テ罪ヲ國家ニ得ス、徒ニ薄海ノ同仇ナ
 ルヲ以テ、大義ヲ伸フ、今若シ擁シテ尊號ヲ稱サハ、是レ
 天ニ二日アリ、復タ勁敵タリ、予將ニ西征ノ銳卒ヲ簡ヒ、
 旆ヲ轉シテ東征セントス、且ツ彼ノ重誅ヲ釋シテ前導
 ト為サントヲ擬スト、可法答書シ辨晰シテ屈セス、畧ニ
 曰、貴國篤ク世好ヲ念ヒ、兵義ヲ以テ動ク、萬代ノ瞻仰此
 一舉ニアリ、若シ手足難ニ膺リ、秦越ヲ并同シ、此幅員ヲ
 規シ、徳ヲ為シテ卒ヘスンハ、是レ義ヲ以テ始テ利ヲ以
 テ終ルナリ、賊人ノ竊笑ヲ貽サン、今賊未タ天誅ニ伏セ
 ス、土ヲ西秦ニ捲キ、方ニ報復ヲ圖ル、此レ獨リ本朝共ニ

天ヲ戴カサルノ仇ノミナラス、抑亦貴國惡ヲ除テ未タ
尽サ、ルノ憂ナリ、伏シテ惟フニ同仇ノ誼ヲ堅クシ、始
終ノ徳ヲ全クシ、師ヲ合シテ進討シ、罪ヲ秦中ニ問ヒ共
ニ逆成ノ頭ヲ梟シ、以テ敷天ノ恨ヲ洩サハ、則義千秋ニ
聞エシ、本朝ハ固ヨリ惟力是レ視ル、此ヨリ兩國世々盟
好ヲ通シ、之ヲ不窮ニ傳ヘハ、亦千載一時ナラスヤト、○
可法又上疏シ帝ニ速カニ賊ヲ討タンコトヲ勸メ、且ツ不
急ノ工役ヲ罷メ、朝夕ノ宴衍左右ノ獻諛一切ニ謝絶セ
ント請フ、帝省セス、時ニ灾異疊見シ、又廟門灾ヲ告ク、帝
深ク禁中ニ居リ、惟幼女ヲ渙シ、火酒ヲ飲ミ、伶官ト演戲

シテ樂ト爲シ、宮殿ヲ修造シ、賞賜節ナク、國用匱乏、搜括
殆ント盡ントス、馬士英國政ヲ濁亂シ、邊警日ニ逼レ、
帝知ラス、小人時ニ乘シテ利ヲ射ル、識者已ニ且夕ニ堪
ヘサルコトヲ知ル、○十一月、清ノ副將唐起龍書ヲ高傑ニ
致シテ降ヲ勸ム、大ナラハ王トシ、小ナラハ侯トセンノ
語アリ、傑聽カス、身士卒ニ先チ河ニ沿ヒ、墻ヲ築キ、カヲ
備禦ニ專ラニス、時ニ徐州ノ逋賊程維孔、河ヲ渡リ、偽テ
傑ニ降ル、傑誘シテ之ヲ斬リ、其衆ヲ收ム、○十二月、都督
陳洪、範南ニ還リ、稱スラク、清ノ兵萬分緊急ナラハ、且夕
南ニ下ラント、馬士英之ヲ惡ミ、曰、四鎮在リ、何ノ慮ント、

時ニ賊禹州襄城等ノ處ヲ突ク、各鎮兵ヲ擁シテ進マス、
惟高傑兵二萬ヲ提ケ大ニ之ヲ敗ル、副將劉鉉總兵劉洪
起等斬獲最モ多シ、○除夕帝與寧宮ニ在リ、色忽チ怡ハ
ス、司禮韓贊周言フ、新宮宜ク懽フヘシ、帝曰、梨園殊ニ佳
ナル者少シト、贊周泣テ曰、臣以爲ラク陛下令節ニ或ハ
皇考ヲ思ヒ或ハ先帝ヲ念ハント、乃チ此想ヲ作ス耶ト、
○弘光元年正月、戶科吳适維新ノ五事ヲ上言ス、一ニ曰
詔旨ヲ信ニス、二ニ曰人才ヲ核ニス、三ニ曰邊才ヲ儲ク、
四ニ曰國法ヲ伸ス、五ニ曰言責ヲ明ニス、帝省セス、○高
傑河ヲ防キ疏シテ請フ、重兵歸德ニ駐シテ東西兼子顧

三、河南ノ總兵許定國ニ聯絡シテ以テ中原ヲ定メント、
定國睢州ニ在リ、傑定國ニ銀幣ヲ遺リ尋テ睢州ニ抵ル、
定國傑ト隙アリ、乃チ宴ヲ張テ傑ヲ享シ、兵ヲ伏テ之ヲ
殺ス、親兵害セラル、者過半、餘衆潰エテ還ル、定國清ニ
奔ル、是ニ於テ監軍衛胤文ニ兵部侍郎ヲ加ヘ、傑カ軍ヲ
總督セシム、○二月、先帝ノ太子ヲ諡シテ獻愍皇太子ト
曰ヒ、永王ヲ永悼王ト曰ヒ、定王ヲ定哀王ト曰フ、未夕幾
クナラス、鴻臚寺少卿高夢箕密カニ奏ス、先帝ノ太子浙
ニ在リト、乃チ召シテ宮ニ入レシム、大學士王鐸、給事中
戴英、詰問シテ其詐冒ヲ知ル、曰ク實ヲ告ケハ汝ヲ救フ

ヘント、即チ跪テ救ハンヲ請フ、乃チ紙筆ヲ授ク、供シテ
曰、高陽ノ人王之明、駙馬王曷カ姪孫ニ係ル、家破リテ南
ニ奔リ、高夢箕カ家人穆虎ニ遇ス、教ルニ東宮ヲ詐冒ス
ルヲ以テス、帝廷臣ニ諭スラク、好ク王之明ヲ護養シ、
驟カニ刑ヲ加ル勿レ、天下ニ正告レ、愚夫愚婦モミナ已
ニ明カナルヲ俟テ、然ル後法ヲ申ヘント、三日ヲ越エテ
文武百官、舉監生員耆老ヲ午門外ニ集メテ之ヲ鞠ス、夢
箕穆虎ミナ具服スル、之明カ言ノ如シ、乃チ之明ヲ刑
部ノ獄ニ下ス、而シテ京師ノ士民謬テ太子ヲ以テ偽ニ
非ストナス、○又故ノ妃童氏アリ、本ト周府ノ宮人ナリ、

乱ヲ逃レテ蔚氏縣ニ至リ、帝ニ旅郎ニ遇ヒ、相依テ一子
ヲ生ム、京師ノ破ル、帝南奔シ各相顧ミス、是ニ至リ自
ラ来ル、帝悅ハス、命シテ錦衣衛監候ニ付ス、童氏獄ニ在
テ宮ニ入ル月日、相離ル、情事ヲ細書シテ呈覽ス、帝棄
テ、顧ス、法司ニ命シテ嚴刑酷拷セシム、童氏號呼シテ
詛罵シ、遂ニ獄中ニ瘦死ス、○三月、許定國清ノ兵ヲ引テ
儀封ニ入ル、李本身劉洪起馳セテ定國カ先鋒劉道行ヲ
斬ル、清ノ兵考城ニ入り、尋テ歸睢ヲ破ル、巡按御史凌嗣
之ニ死ス、清ノ兵進テ江北ニ逼リ、直チニ徐穎ヲ陷ル、總
兵李成棟南ニ遁ル、○四月、寧南侯左良玉兵ヲ舉テ東ニ

下り、疏ヲ馳セテ馬士英カ奸邪國政ヲ亂ル_一ヲ上言シ、
其七大罪ヲ列シテ之ヲ誅セント請フ、又檄ヲ傳ヘテ其
罪ヲ聲ス、中外囂然タリ、士英大ニ惧ル、京師戒嚴、劉孔昭
阮大鍼等ヲ遣シテ同ク之ヲ禦カシム、史可法連疏シテ
警ヲ告ケ、且士英ニ移書シテ將ヲ選ヒ兵ヲ添ヘン_一ヲ
乞フ、士英惟良玉カ兵ヲ慮テ應セス、時ニ阮大鍼日ニ楊
維垣ト謀リ、必ス盡ク東林ノ諸臣ヲ殺サント欲ス、曰先
帝ノ社稷ニ殉_一ヲ致スハ、東林諸臣ナリト、大獄將ニ
興ラントス、尋テ上游警ヲ告ルヲ以テ、姑ク之ヲ緩クス、
或人夜半士英カ堂中ニ書シテ云、闖賊無門、匹馬橫行、天

下、元兇有耳、一兀直搗中原、其人ヲ索レ_レ得ス、左良玉
ノ兵東下スルニ當リ、帝唯淑女ヲ選_一ヲ以テ急ト爲ス、
是ヨリ先應天府三名ヲ選ヘ_レ中ラス、司禮監又六名ヲ
選ス、亦中タラス、特ニ内監田壯國ヲ杭州ニ遣シ、陳氏王
氏李氏ノ三人ヲ選ハシメ、元暉殿ニ進ム、○清ノ兵已ニ
徐碭ヲ徇ヘ、亳泗ヲ下シ、勢ニ乘シテ淮ヲ渡ル、帝群臣ヲ
召シテ對セシム、馬士英カメテ亟カニ左良玉ヲ禦カシ
ト請フ、大理寺卿姚思孝等言フ、淮揚最モ急ナリ、亟カニ
防禦スヘシト、帝士英ニ諭シテ曰、左良玉カ本意原ト曾
テ、反叛セス、今日當ニ淮揚ヲ守ルヘシト、士英厲聲ニ諸

臣ヲ指シ對テ曰此レミナ良玉カ死黨爲メニ游說スルナリ、其言聽クヘカラス、寧口君臣ミナ清ニ死スルモ、左良玉カ手ニ死スヘカラスト、目ヲ瞋シテ大ニ呼ハル、異議アル者ハ斬ラント、帝嘿然タリ、諸臣ミナ爲ニ舌ヲ咋ム、○清ノ兵揚州ヲ攻ム、史可法之ヲ禦キ頗ル斬獲アリ、攻ムルヲ益ク急、血奏シテ救ヲ請ヘ、臣報セス、城遂ニ陷リ可法之ニ死ス、兵部尚書張伯鯨執ハレ屈セスシテ死ス、妻楊氏媳郝氏之ニ從テ、明日帝群臣ヲ召シテ遷都ノ計ヲ問フ、禮部尚書錢謙益可カス、馬士英黔兵ヲ調シテ入衛セシメ、貴陽ニ辨走セント請フ、吳希哲等カ諫シテ

之ヲ止ム、○左良玉兵ヲ舉ケ數日ナラスシテ病死ス、○五月、清ノ兵既ニ揚州ヲ破リ、京師ニ逼ル、帝猶ホ梨園ヲ集メテ演戲シ、諸内臣ト雜坐シ、酣飲シ、夜ニ乘シテ出奔ス、馬士英太后ヲ奉シテ浙ニ走ル、○忻城伯趙之龍各城門ヲ閉チ、以テ清兵ヲ待ツ、居民競テ城ノ内外ノ黔兵ヲ殺シ、逸スル者ナシ、監生趙某アリ、市民百衆ヲ率、井王之明ヲ獄ヨリ出シ、擁シテ宮中ニ入り、殿ニ登リ、鐘ヲ鳴セトモ、百官至ル者ナシ、○時ニ清ノ豫王多鐸已ニ都城ニ薄ル、趙之龍王之明ト同ク出テ降ル、多鐸京ニ入ル、劉良佐降リ、多鐸ノ命ヲ奉シテ帝ヲ追ヒ、蕪湖ニ至テ之ニ及

又且ツ黃得功ヲ召ス、得功從ハス、良佐射ヲ之ヲ斃シ、帝
 ヲ挾テ去ル、帝多鐸ヲ見、尋テ江寧縣ニ囚ハル、時ニ張捷
 楊維垣等前後難ニ殉フ者數十人、百川橋下ニ乞死アル
 秦淮河中ニ投シテ死ス、詩ヲ橋上ニ題シテ云、三百年來
 養士朝如何、文武盡皆逃、綱常留在界田院、乞巧羞存命一
 條。○使臣左懋第北ニ在テ、江南ノ陷ルヲ聞キ、七日食ハ
 ス、清ノ攝政王多爾袞ガ見テ之ヲ數ム、懋第對ヘス、惟
 一死ヲ請フ、命シテ髮ヲ薙ラシム、堅ク肯ンセス、遂ニ害
 セラル、絶命ノ詩ニ云、峽折巢封歸路賒、片雲南下意如何、
 寸丹冷魄消難盡、蕩作寒烟總不磨。○清ノ豫王多鐸既ニ

江浙ヲ定メ、帝及ヒ王之明ヲ挾テ北京ニ歸ル、閏六月、唐
 王福州ニ立ツ、

○帝聿釗 太祖ノ後ナリ、南陽ニ封セラレ、唐王ト爲

ル、初ノ父天シ愛ヲ祖ニ失シ、兩叔嫡ヲ奪ハシ、一ヲ謀ル
 ヲ以テ、未タ名ヲ請フ、一ヲ得ス、祖端王薨スルニ及テ、嗣
 ト爲ルヲ得、後兵ヲ統ヘ、勤王シテ擅ニ南陽ヲ離ル、ヲ
 以テ高墻ニ錮セラレ、赦ニ會テ出シ、性率直、詩書ヲ喜ミ、
 手ツカラ傳檄ヲ草ス、清兵ノ江ヲ渡ルヤ、南都守ラス、總
 兵官鄭鴻逵、鄭彩、師ヲ撤シテ閩ニ回リ、唐王ノ河南ヨリ
 來ルニ會フ、乃チ奉シテ俱ニ南ニ福建ニ至ル、福州ノ巡

撫張肯堂、巡按御史吳春枝、禮部尚書黃道周、南安伯鄭芝龍等共ニ會議シ立テ、監國ト爲ス、鴻逵位ヲ正サント請フ、芝龍固ク諍テ不可トナス、尋テ議ヲ定メテ帝位ニ即キ、福州ヲ改メテ天興府ト爲ス、○鄭芝龍ヲ封シテ平虜侯ト爲シ、鄭鴻逵ヲ定虜侯トス、其他官ヲ進ムルニ差アリ、是ニ於テ耆碩ヲ數求シ、賢才ヲ招選シ、内外文武濟々然タリ、兵餉戰守ノ機宜、專ラ鄭芝龍ニ委ス、芝龍幼ヨリ海ニ習ヒ海情ヲ知ル、凡ソ海盜ニナ故盟、或ハ門下ニ出ツ、撫ニ就テヨリ後、海船鄭氏ノ令旗ヲ得サレハ、往來スルヲ得ス、每船例シテ三十金ヲ入ル、歲ニ入ル、丁千萬

計、芝龍此ヲ以テ富國ニ敵ス、自ラ城ヲ安平ニ築キ、艦舳直チニ卧内ニ通ス、其守城ノ兵自ラ餉ヲ給シテ官ニ取ラス、旗幟鮮明、戈甲堅利、故ニ八閩鄭氏ヲ以テ長城トナス、芝龍ノ弟芝虎、勇軍ニ冠タリ、昔劉香ヲ征シテ海ニ没ス、次ハ鴻逵、次ハ芝豹、俱ニ侯伯タリ、一門聲勢烜赫タリ、子龍初ノ落魄シ去テ日本ニ之キ、倭婦ヲ娶テ一子ヲ生ム、森ト曰フ、數歲ニシテ福建ニ歸リ、撫ニ就キ、劉香ヲ收ム、功ヲ以テ都督ニ遷ル、是時森倭ニ在テ已ニ七歲、芝龍屢ク請テ之ヲ得タリ、森風儀整秀、倭儻ニシテ大志アリ、十五ニシテ弟子員ニ補セラレ、讀書穎敏、章句ヲ治メス、

此ニ至テ陞見ス、年二十三、帝之ヲ奇トシ其背ヲ撫テ、
 曰、惜ラクハ一女ノ卿ニ配スルナキヲ、卿當サニ忠ヲ吾
 家ニ盡スヘシ、相忘ル、ナカント、姓ヲ朱ト賜ヒ成功ト
 改名シ、御營中軍都督ニ封シ、尚方ノ劍ヲ賜フ、儀駙馬ニ
 同シ、是ヨリ中外國姓ト称ス、是年日本其母ヲ送帰ス、○
 李自成南走シテ辰州ニ至リ、勢彌ク感リ食盡キ、逃ル、
 者益々衆シ、自成自ラ輕騎ヲ將井テ抄掠ス、清人伏ヲ設
 ケテ之ヲ邀ヘ、殺傷殆ント盡ク、自成數十騎ト邨落中ニ
 走テ食ヲ求ム、邨民共ニ之ヲ撃テ殺ス、侄李過僅カニ其
 屍ヲ奪ヒ、一邨ヲ滅シテ還リ、袞冕ヲ以テ羅公山下ニ葬

ムル、賊ノ諸將李過ヲ奉シテ首ト為シ、湖ヲ渡リ險山ノ
 中ニ入ル、群盜俱ニ散亡ス、○八月、粵西ニ靖江王ト云者
 アリ、監國ト稱ス、帝ノ詔至レバ服セス、兵ヲ舉テ將ニ東
 セントス、廣西ノ巡撫瞿式耜總制丁魁楚ヲシテ備ヲ十
 サシメ、戰テ大ニ之ヲ敗リ、靖江王及ヒ其黨ヲ擒ニシ、械
 シテ福州ニ至リ、俱ニ市ニ斬ス、○是ヨリ先清ノ兵浙ニ
 入ル、潞王城ヲ以テ降ル、蘇松ノ巡撫祁彪佳、左都御史劉
 宗周等之ニ死ス、原任大學士高弘圖食ハスシテ死ス、○
 時ニ馬士英所部ヲ率井、弘光帝ノ母妃ヲ奉シテ紹興ニ
 至ル、紹ノ人士猶ホ未タ弘光帝ノ所在ヲ知ラス、原任九

江僉事王思任上疏シテ士英ヲ斬ラント請フ、又書ヲ士英ニ上リ其專權國ヲ誤ルヲ歎ス、自刎シテ天下ニ謝セン、
一ヲ劾ム、原任山西僉事鄭之尹カ子遵謙張國維方逢年等ト魯王ヲ台ニ迎立ス、魯王紹興ニ監國タリ、國維首トシテ馬士英カ國ヲ誤ル十大罪ヲ疏ス、士英懼レテ敢テ入朝セス、時ニ逢年國維等俱ニ大學士タリ、遵謙義興伯ニ封セラレ、國維師ヲ江上ニ督シ、御史陳潛夫ニ命シテ各藩鎮ノ兵馬ヲ監セシム、兵馬雲集ス、會々閩中ノ頌詔至リ、諸モ口富貴ヲ求ムルモノ爭テ之ニ應セント欲ス、監國令ヲ下シテ台ニ返ル、士民惶々タリ、國維星馳

シテ疏ヲ帝ニ上ツル、謂ヘラク國大變ニ當ル、凡ソ高帝ノ子孫臣庶タル者、當ニ心ヲ同クシカラフ併スヘキ所ナリ、成功ノ後關ニ入ル者ハ王タラン、監國藩服ニ退居ス、禮誼昭然タリ、且ツ監國人心奔散ノ日ニ當リ、鳩集シテ勞ヲ爲ス、一日正朔ヲ南拜セハ、鞭長クシテ及ハス、猝然トシテ變アラハ、唇亡ヒテ齒寒カラシ、悔エ氏追フヘキナシ、臣ハ老臣ナリ、豈ニ朝秦暮楚ノ客ノ如クナランヤト、疏出シ、議始テ定リ、而シテ浙閩水火ヲナス、○隆武元年正月、鄭芝龍已ニ府ヲ福州ニ開キ、坐ナカラ九卿ヲ見權勢朝ニ振ヒ、日ニ文官ト忤フ、帝心ニ芝龍カ恃ムヘ

カラサルヲ知レ、及卒ニ之ヲ制スルナシ、芝龍モ亦謂ヘ
ラク、関ヲ出テスンハ、以テ衆心ヲ壓スルナシト、乃チ兵
ヲ分テ二ト為シ、聲言シテ萬人トナス、實ハ千人ニ滿ク
ス、鄭鴻達、鄭彩ヲシテ浙東、江西ニ出テシム、帝淮陰ノ故
事ニ倣ヒ、壇ヲ郊ニ築イテ之ヲ拜送ス、既ニ関ヲ出テ、餉
缺クト稱シ、駐テ行カス、詔書切ニ責ム、芝龍已ムヲ得ス
關ヲ踰エ行ク、一四五百里ニシテ還ル、○朱成功ヲ忠孝
伯ニ封ス、成功一日帝ノ愁坐スルヲ見テ泣テ奏レテ曰
陛下、蠶々トシテ樂マサルハ、臣カ父ノ異志アルヲ以テ
ニ非サルヲ得ンヤ、臣國ノ厚恩ヲ受ク、義反顧トシ、臣死

ヲ以テ陛下ヲ扞ラント、○二月、帝意ヲ決シテ親征シ、蹕
ヲ劍津ニ駐ム、此時ニ當テ兵羸レ、餉絶エ、當事ノ臣、談兵
事ニ及フ者ナク、舉朝夢ノ如ク醉フ如シ、識者ヲ待タス
シテ其敗壞ヲ知ル、○清ノ江南招撫使洪承疇、福建招撫
使黃燕胤、鄭芝龍ト里ヲ同フス、芝龍密カニ使ヲ遣ハシ
微行シテ、款ヲ通セシメ、疏シテ海寇ヲ征スルト稱シテ
去ル、守関ノ將施福餉ヲ缺クト聲言シ、盡ク兵ヲ撤シテ
安平鎮ニ還ル、○六月、清ノ兵江ヲ渡ル、方國安、馬士英、監
國ヲ獻シテ、清ニ降ラン、○謀リ、人ヲ遣シテ、監國ヲ守
ラシム、守者忽チ病ム、監國脱スルヲ得テ、海船ニ登リ、命

ヲ張國維ニ傳ヘテ四邑又過防セシメ、遂ニ東海ニ過キ
リ再舉ヲ謀ル。○清ノ兵義烏ヲ破リ、ヒ里寺ニ至ル、張維
國衣冠ヲ具ヘ南向再拜シテ曰、臣力ヲ竭クト、絶命ノ詩
三章ヲ作り、從容トシテ園池ニ赴テ死ス、與國公王之仁
其妻妾並ニ兩子婦幼女諸孫ヲ載セ、尽ク蛟門ノ下ニ沈
メ、獨リ松江ニ至リ、内院洪承疇ヲ見、自カラ請テ戮ニ西
市ニ就ク、兵部侍郎陳函輝、王思仁等十四人難ニ殉ス、馬
士英阮大鍼等猶ホ殘兵ヲ擁シテ數ク関ニ入ラント請
ス、帝其罪ノ大ナルヲ以テ許サス、士英遁レテ台州ノ山
寺ニ至テ僧トナル、隨テ清ノ將ニ搜獲セララル、大鍼迎ヘ

降ル、方國安等髮ヲ剃テ俱ニ降ス、○帝鄭芝龍カ去テヨリ
後、乃チ計ヲ定メテ贛州ニ幸ス、八月、順昌ニ抵ル、清ノ兵
將サニ踵テ至ラントスルヲ聞キ、倉皇トシテ騎シテ奔
ル、從フモノ惟リ何吾邵、郭維經、朱繼祚、黃鳴俊ノ數人ノ
ミ、已ニシテ何ト郭ト亦散シ去ル、帝將ニ贛州ニ入ラン
トシ、因テ停ル、一日、龍鳳衣ヲ曬ス、清兵至リ、帝后及ヒ
繼祚、鳴俊ヲ擒ニシ、械シテ福州ニ至ル、貝勒帝及ヒ后ヲ
市ニ斬ル、繼祚亂兵ノ夕メニ殺サル、鳴俊ニ五品官ヲ授
ケン、トヲ許ス、老疾ヲ以テ辭ス、○是ヨリ先清ノ兵順昌
ニ至リ、龍扛ヲ搜リテ馬士英、阮大鍼、方國安父子方游山

カ連名ニシテ、駕関ヲ出テハ内應ヲナサント請ヘル疏
ヲ得タリ、已ニ降ルノ後ニ在リ、大賊游山自ラ崖ニ投シ
テ死ス、仍テ屍ヲ戮ス、士英等四人延平城下ニ駢斬シ、家
眷百餘口悉ク兵丁ニ給賜ス、○九月、清ノ兵興泉汀邵漳
州等ノ處ヲ畧シテ、ミ十之ヲ陷イル、朱成功カ母泉ニア
リ、去ラスシテ之ニ死ス、○十月、鄭芝龍安平ヲ保ス、軍容
烜赫、戰艦齊備ス、前ニ遣ス所ノ洪黃ノ信未夕通セサル
ヲ以テ、猶豫シテ未夕敢テ師ヲ迎ヘス、已ニシテ清ノ貝
勒書ヲ以テ之ヲ招ク、閩粵總督ノ印ヲ鑄テ相待ツノ語
アリ、芝龍書ヲ得テ大ニ喜フ、其子弟ミ十芝龍ヲ勸メテ

海ニ入ラレム、曰魚淵ヲ脱スヘカラスト、成功泣テ諫テ
曰父子ニ忠ヲ教フ、貳ヲ以テスルヲ聞カス、且北虜何ノ
信カ之レアラン、芝龍曰、喪乱ノ天一彼一此誰レカヨク
之ヲ常ニセント、遂ニ降表ヲ進ム、芝龍福州ニ至ル、貝勒
手ヲ握テ甚夕懽ヒ、矢ヲ折テ誓ヲナシ、遂ニ之ヲ挾ンテ
北ス、從フモノ五百人、朱成功乃チ所部ヲ率井テ海ニ入
ル、芝龍歎シテ曰、成功來ラス、清朝其レ道ニ敞レンカ、君
ヲ憂レムル者必ス此ノ子ナラント、成功主ニ遇ヒ爵ヲ
列スト、雖尺未夕嘗テ一日兵柄ニ與カラス、意氣狀貌猶
ホ儒生ノ如シ、乃チ悲歌恍惚シテ、著ル所ノ儒巾襪衫ヲ

携へ、文廟ニ赴テ之ヲ焚キ、先師ヲ拝シテ曰、昔ハ孺子タ
リ今ハ孤臣タリ、向背去留、各ク作用アリ、謹テ儒服ヲ謝
スト、高揖シテ去ル、善ミスル所ノ陳輝、張進、施琅、施顯、陳
霸、洪旭等九十餘人ト、二巨艦ニ乗シテ去リ、兵ヲ南澳ニ
収メテ數千人ヲ得タリ、文移ニ忠孝伯招討大將軍罪臣
國姓ト稱ス、鄭彩、鄭鴻逵モ亦所部ヲ率テ海ニ入ル、○十
月、永明王肇慶ニ立ッ

○帝由榔 桂王ノ子、神宗ノ嫡孫ナリ、初メ衡陽ニ封
セラレ、寇亂ヲ以テ徙テ梧ニ寓ス、會ク桂王已ニ薨シ、永
明袁經ハ中ニ在リ、福州既ニ失シ、兩廣ノ總督丁魁楚、廣

西ノ巡撫瞿式耜ト、監國ヲ會議ス、兵部尚書呂大器等聞
ヨリ至リ共ニ謀テ之ヲ立テ、肇慶ノ府署ヲ以テ行宮ト
ナス、僚署ヲ置クテ差アリ、魁楚大器俱ニ大學士トナル
○十一月、福建ノ舊相蘇觀生等遁レテ廣東ニ回リ、布政
使顧元鏡ト、隆武帝ノ弟唐王聿錚ヲ擁立シテ、監國トシ、
年ヲ紹武ト號ス、贛州ノ敗聞至ルニ會ヒ、司禮大監王坤
駕ヲ趣カレ、梧ニ移テ之ヲ避ケシム、瞿式耜之ヲ争ヘ、
得ス、遂ニ梧州ニ移リ、尋テ肇慶ニ還ル、乃チ兵科給事彭
耀ヲ遣シ、廣州ニ往テ之ヲ諭サレメ、倫序監國ノ前後、國
家仇讎ノ利害ヲ譬曉ス、觀生等耀ヲ市ニ殺シ、日ニ兵ヲ

集ノテ肇慶ニ向フ、○十二月清ノ總兵李成棟廣州ヲ陷
 レ、唐王及ヒ周王益王遼王等ヲ擒ニシテ、盡ク之ヲ斬リ、
 蕪觀生ヲ誅シ、遂ニ兵ヲ發シテ南詔ニ往カシメ、親カラ
 肇慶ニ下ル、帝小艇ニ駕シ、西峽ニ上テ之ヲ避ク、○永曆
 元年正月朔、駕梧州ニ至ル、時ニ丁魁楚梧西ヨリ岑溪ニ
 走ル、王化澄潯州ニ走ル、隨行ノ者止夕瞿式耜一人ノミ、
 ○李成棟肇慶ヲ攻陷シ、梧州ニ入ル、廣西ノ巡撫曹煒出
 テ降ル、○二月、帝桂林ニ抵ル、瞿式耜殿陛ヲ肅ニシ、守禦
 ニ敕シテ、誕ニ楚蜀ノ各鎮ニ告ケレム、○朱成功師ヲ提
 ケテ南澳ヨリ歸リ、鼓浪嶼ニ泊レ、鄭彩鄭聯厦門金門ニ

踞シ數ク兵ヲ出ス、沿海ノ郡邑大ニ震ス、○丁魁楚岑溪
 ニ在リ、清人之ヲ招ケテ降ラス、清人之ヲ攻メ大ニ戦フ、
 丁カ兵敗ル、魁楚箭ニ中テ死ス、濕江平樂及ヒ高雷廉ノ
 三府俱ニ清ニ降ル、○三月、清ノ兵海ヲ渡リ瓊州ヲ陷ル、
 警報疊リニ至ル、王坤駕ヲ趣カシテ楚ニ往カシム、瞿式
 耜之ヲ争ヘテ聽カス、式耜ニ命シテ桂州ニ留守セシム、
 各路悉ク歸度ヲ受ケシメ、駕全州ニ抵ル、○四月、清ノ兵
 桂林ニ薄リ文昌門ニ衝入ス、時ニ桂林ノ守將焦璉全州
 ヨリ歸リ、擊テ之ヲ卻ク、式耜璉ト危城ニ孤守シ、安國公
 劉承胤カ兵ヲ徵ス、承胤兵數千ヲ發シテ桂ヲ援フ、未ク

幾クナラス、承胤甚ク横、帝ヲ脅劫シテ武崗ニ幸セシム、
帝竟ニ武峒ニ駐ル、○五月、清ノ兵兵變ヲ偵ヒ、積雨シテ
城壞ル、ニ乗シ、環テ桂城ヲ攻ム、吏士ミナ人色ナシ、焦
璉創ヲ負ヒ臂ヲ奮テ大ニ呼ハリ、師ヲ督シ門ヲ分テ嬰
守ス、西洋銃ヲ用非撃テ馬騎ニ中ツ、尋テ城ヲ出テ、戰
ヒ、勇ヲ奮テ擊殺シ、明日復夕出テ戰フ、清ノ師敗レ、去ル
式耜先ツ路將馬之驥ヲシテ、隔江ニ伏シテ犄角接應セ
シ、固圍倍ク慎ム、三月ノ内清ニ危ク兵ニ亂レ、式耜一
手ニ指揮シ底定ス、璉久ク桂ニ將トシテ桂人ノ心ヲ得
タリ、式耜國士ヲ以テ之ヲ遇ス、故ニ獨リ璉カ死カヲ得

タリ、○瞿式耜上書シテ、蹕ヲ全陽ニ返サントテ請ヘト
モ聽カス、焦璉出テ、柳潯及ヒ梧州ヲ復ス、式耜具疏シ
テ桂林ニ還ラントテ請ヒ、督師何騰蛟等ト籌畫シ、期ヲ
刻シテ師ヲ出ス、全州戦ヒ勝テ、諸帥營ヲ連子テ軍入清
ノ兵因テ楚ニ次ス、○十一月、帝象州ヨリ桂ニ抵ル、瞿式
耜嚴起恒ト並ヒ相タリ、○二年二月、何騰蛟師ヲ督シテ
全州ヲ出ツ、兵和セズ、焦璉平樂ニ下ル、郝永忠興安ニ壁
ス、未タ幾クナラス、永忠カ營襲ハレ、闕ニ至テ兵ヲ撤セ
ント欲ス、左右禁近帝ノ遷ラントテ欲ス、式耜持シテ可
カス、左右禁近周章シテ止ム能ハス、夜半駕已ニ行ク潰

兵肆掠シテ公署ヲ蹂躪シ、職官一モ免ル、ヲ得ル者ナ
シ、式耜通ヲレテ舟ニ登リ、漳水港ニ至ル、刑部侍郎遠生、
給事中丁時魁等俱ニ至ル、式耜遠生等ヲ集メテ民屋ニ
入ラシメ、立トコロニ檄ヲ草シ、路ヲ分テ四モニ發ス、暫
ラク陽朔ニ駐マリ、璉カ兵ヲ催カシテ上接セシム、督師
何騰蛟永寧ヨリ至ル、璉平樂ヨリ兵ヲ統ヘテ至ル、式耜
復タ桂署ニ入ル、○三月、清ノ兵桂城ノ空虚ナルヲ疑ヒ、
直チニ桂ノ北門ニ抵ル、何騰蛟兵ヲ督シテ之ヲ禦ク、清
ノ兵甘棠ヲ渡テ去ル、帝南寧ニ駐ル、詔シテ瞿式耜ヲ旌
シテ銀幣ヲ賜ヒ、又精忠貫日ト云金圖書一枚ヲ賜フ、式

耜念ヘラク南寧蠻郷ニシテ久シク駐マルヘカラスト、
日ニ帝ノ爲メニ道ヲ清メ、勲鎮將士ニ督シテ、直チニ全
州ヲ取ラントス、○四月、皇子生ル、冊シテ太子トナシ、天
下ニ赦ス、瞿式耜念ヘラク講官ヲク經筵御セ入石室塵
封ス、何ニ由テ得失ヲ聞カント、八箴ヲ扇ニ手書シテ之
ヲ進ム、○五月、督師何騰蛟全陽ヲ復ス、○六月、清ノ總兵
粵東ノ李成棟歸順シ、具疏シテ駕ヲ迎ス、又江右ノ金聲
桓南昌ニ據リ、使ヲ遣ハシテ降ヲ請フ、兩粵全土ト稱ス、
帝梧州ヨリ肇慶ニ入ル、○三年正月、清ノ兵湘潭ヲ破ル、
督師何騰蛟之レニ死ス、信豐南昌相繼テ敗ル、李成棟金

聲桓ニテ陳ニ没ス、帝壇ヲ設ケテ親カラ祭リ、瞿式耜ニ命シテ留守シテ師ヲ督セシム、○三月、朱成功兵ヲ銅山ニ募リ、漳浦ヲ攻メ分水關ニ攻ス、○四月、清使ヲ遣ハシ書ヲ貽テ瞿式耜ヲ招久、式耜從ハス、○七月、帝使ヲ遣ハシ島ニ至ラシメ、朱成功ヲ封シテ延平公ト爲ス、○四年正月、南雄守ラス、韶州モ亦陷ル、帝震恐シテ舟ヲ戒メテ西上ス、瞿式耜留ムレトモ聽カス、遂ニ德慶ニ移リ、梧州ニ抵ル、○六月、朱成功潮州ニ入ル、是ヨリ先鄭鴻逵、潮州揭陽ニ踞シテ成功ヲ邀ス、時ニ鄭彩、鄭聯、兩島ニ踞シ、其將章雲飛、恣肆不道ナリ、成功密カニ諸部ト計ツテ曰、兩

島ハ吾家ナリ、卧榻ノ側豈ニ人ノ鼾睡ヲ容レンヤト、乃チ部勒ヲ嚴ニシ、揭陽ヨリ帆ヲ揚ケテ厦門ニ抵ル、聯虞ラス出テ見ニエ、交拜シテ歡ヲ極ム、成功笑テ曰、兄ヨク一軍ヲ以テ假サレンカト、聯未夕對ヘス、銳ヲ執ル者前ム、聯乃チ曰、唯々惟命ノマ、ト、諸軍警服シテ敢テ動クモノナシ、成功已ニ聯カ軍ヲ并セテ威稜日ニ懔ク、海上ノ軍ミナ之ニ屬ス、四萬餘人許、彩所部ヲ率井テ南ニ逃ル、○十一月、清ノ兵全州ニ薄マリ、城中大ニ亂ル、瞿式耜戢メシムレ、氏得ス、衣冠シテ署中ニ危坐ス、適ク總督張同敞、靈州ヨリ回り、式耜ニ遇ス、曰、事迫レリ、公奈何スルヤ

ト、式耜曰、封疆ノ臣ハ封疆アルヲ知ルノミ、封疆已ニ失セハ、身將夕安クンカ往ク、同敞曰、公カ言是ナリ、敞當ニ之ヲ共ニスヘシト、遂ニ笑テ式耜ト飲ス、明日執ハレ清ノ定南王孔有徳ニ見ユ、式耜死ヲ以テ自ラ誓ヒ、復タ一言セス、有徳命シテ式耜同敞ヲ別處ニ幽ス、式耜詩ヲ賦シテ曰ニ同敞ト賡和ス、遂ニ害セラル、其絶命ノ詩ニ云、從容待死、與城亡、千古忠臣自主張、三百年來恩澤久、頭終猶帶滿天香、ト、死スルノ日、冬雷電大ニ發ス、遠近ミナ爲ニ異ヲ稱ス、○帝復夕去テ南寧ニ上リ、土虜ニ入ル、嚴起恒王化澄等ミナ隨テ去ル、○十二月、清ノ兵廣州ヲ陷ル

鎮帥江寧伯杜永和瓊州ニ奔ル、○五年正月、朱成功謀テ杜永和ニ接シ、衆ヲ率井テ南ス、二月、舟平海衛ニ次ス、是時清ノ將馬得功兩島ノ備ナキヲ偵テ、廈門ヲ攻メ、陷ル、鴻逵揭陽ヲ棄テ、島ニ回リ、得功ヲ圍ム、得功退カント欲スレバ得ス、鴻逵ニ謂テ曰、公等ノ家眷ミナ安平ニ在リ、若シ得功出テスンハ、恐クハ公カ家ニ不利ナラシト、鴻逵之ヲ患ヒ、乃チ得功ヲ逸ス、四月、成功平海ヨリ至ル、得功公テ兩日ナリ、成功大ニ悔恨シ、失律ノ罪ヲ按シテ鄭芝莞ヲ殺ス、芝莞ハ成功カ從叔島ヲ守ル者ナリ、諸將震惧シ、兵勢復夕振ス、鴻逵白沙ニ泊シ、寨ヲ築テ之ニ居

ル五月、成功南溪ヲ攻メ敗リ、十二月、漳浦及ヒ海澂ヲ攻
ム、清ノ守將楊世德、陳堯策、郝文興等ミナ降ル。○六年二
月、朱成功長泰ヲ攻ム、清ノ副將王進中提督甘輝ト北溪
ニ遇フ、二人俱ニ雄健軍ニ開ル。久シ、雌雄ヲ決セン。一
ヲ念フ、乃チ撾ヲ奮ヒ、矢ヲ傳ケ、兩馬ヲ以テ相當ル。輝搥
セハ進則隱レ、進敷スレハ輝亦之ヲ落ス。巳ヨリ午ニ至
リ、縱橫跌宕既ニシテ、兩家ノ兵至リ、乃チ解久、進長泰ニ
入ル。輝日夜攻テ之ニ克ク、進數十騎ト出テ、郡城ニ走
ル。漳浦屬邑俱ニ下ル。○五月、清ノ總兵馬逢知來リ、援ヒ、
突テ郡城ニ入ル。朱成功之ヲ圍メトモ下ラス、城中食盡

キ人々相食シ、枕籍シテ死スル者七十餘萬人。十月、清ノ
援兵大ニ至ル、乃チ圍ミヲ解テ去ル。成功久シク堅城ニ
頓シ、師老レ糧匱久矣ヲ收メテ海澂ヲ保ス。○帝安隆所
ニ在リ、李定國ヲ封シテ西寧王トナシ、清ノ定南王孔有
德ヲ桂林ニ、敬謹王尼堪ヲ衡州ニ破ル。○七年五月、清ノ
兵海澂ヲ攻ム、朱成功衆ヲ督シテ防禦ス、一夕忽チ空砲
遞ヒニ發ス、成功諸將ニ謂テ曰、賊將ニ城ニ臨マントス
ト、兵ヲ勒シ斧ヲ持テ之ヲ待ツ、清ノ兵濠ヲ渡リ、鄒ニ入
リ、大ニ呼テ城ニ登ル、衆斧ヲ舉テ之ヲ砍ル、清ノ兵死傷
甚夕衆久大敗シテ宵ル遁ル、澂ノ守益々堅シ。○八年五

月清使ヲ遣シ朱成功ヲ招テ海澄公ト爲ス成功從ハス、
 數ク兵ヲ出シテ福興泉漳等ノ郡ニ縱横ス十月清復夕
 之ヲ招ク成功從ハス清主怒テ鄭芝龍ヲ高俎ニ置ク成
 功顧ニス十二月漳州ヲ攻ム清ノ守將劉國軒朴世用等
 降リ屬縣十邑ニナ下ル勝ニ乘シテ泉州ノ屬邑ヲ畧ス
 成功軍律明肅淫畧スル所ナシ所部ヲ分テ七十二鎮ト
 爲シ鄧會ヲ以テ州事ヲ知セシム監國魯王虞溪王寧靖
 王ヲ奉シテ金門ニ居ラシム凡ソ諸宗室厚ク給贍シ避
 隆ノ措紳王忠孝等ヲ禮待シ時ニ軍國ノ大事ヲ咨ス○
 九年朱成功數ク軍ヲ出シ六月安平鎮漳州及ヒ惠安南

安同安ノ三邑ヲ取ル十一月清ノ定遠大將軍度子王閩
 ニ入ル成功島ニ回ル○十年正月度子王沿海ヲ略シ兩
 島ヲ攻メ大敗シテ還ル六月朱成功將ニ北略セントス
 期ニ臨ンテ部將黃梧蘇等陰カニ清ニ降リ諸將潰去ル
 甘輝亂ヲ聞テ進ミ攻メテ勝タス遂ニ成功ニ從ヒ閩安
 鎮ヲ破リ福州ニ逼ル○十一年三月帝雲南ニ在リ鄭鴻
 逵浯州ニ卒ス朱成功島ニ回ル○十二年帝使ヲ遣シ海
 ニ航シテ朱成功ヲ延平郡王ニ進メ甘輝ヲ崇明伯トス
 其他將ヲ拜スル差アリ七月成功大舉シテ南京ヲ取シ
 一ヲ議シ諸將ヲ部署ス八十萬ト號ス戈船八千帆ヲ揚

ヲ北上ス、浙江ニ至リ樂清等ノ州縣ヲ攻テ之ニ克ツ、○十三年五月帝永昌ニ在リ、朱成功崇明ニ至ル、諸將先ツ崇明ヲ取テ老營ト為サント請入成功聽カス、七月焦山ニ至リ諸將ニ謂テ曰瓜鎮ハ金陵ノ門戸タリ、須ラク先ツ之ヲ破ルヘシト、諸將ニ機宜ヲ授ケ自ラ親軍ヲ督シテ進ム、中提督甘輝左提督翁天祐等直チニ瓜洲ヲ衝キ、清ノ將朱衣祚左雲龍等ト戦テ之ニ克チ、瓜洲ヲ陷レ、遂ニ進テ蕪湖ヲ取り揚子江ヲ亂ル、清ノ兵之ヲ攻メ大敗シテ北ケ、鎮江ノ屬邑ミナ下ル、成功乃チ張煌言楊朝棟等ヲシテ江南江北ヲ招撫セシム、此ニ於テ常州徽州池州太平滁和六合等ノ州郡附ント欲スル者多シ

蕪湖縣ノ清ノ守將ミナ遁ル、甘輝曰、瓜鎮ハ南北ノ咽喉タリ、但此ニ坐鎮シテ瓜洲ヲ斷ヤハ、則山東ノ師下ラス、南都勞ヤスシテ定ラント、成功聽カス、師ヲ率非テ舟ニ登リ、進テ金陵ヲ取ントシ、四方ニ檄ス、八月舟觀音門ニ至リ、岸ニ登テ獅子山ニ軍ス、甘輝曰、彼レ衆我レ寡、其未タ定マラサルヲ擊タハ、宜シク抜クヘシ、若シ彼レ集リテ禦クハ固クハ、君必ス之ヲ悔ント、成功聽カス、輝退テ人ニ告テ曰、吾此ニ復ラスト、既ニシテ清ノ兵前鋒ノ營ニ薄ル、統領余新擊テ之ヲ敗リ、遂ニ敵ヲ輕ンシテ備ヘス、清ノ副將梁化鳳其營ヲ襲ス、新倉皇出テ走リ、遂ニ擒

二就久明日清ノ兵中堅ヲ衝久、成功撃テ之ヲ敗ル、清ノ
兵數萬左前鋒ノ營ニ薄ル、將士轉戦シ三合三却遂ニ敗
走シ、諸將ニテ陣没ス、成功軍ヲ麾イテ急ニ退久、獨リ甘
輝且ツ戦ヒ且走ル、江ニ至リ騎能ク屬スル者三十餘人、
凡ソ撃殺スル所數十百人馬躡テ獲ラル、城南ノ金水橋
ニ至リ余新方ニ膝ヲ屈ス、輝怒テ之ヲ踢リ手ヲ戟ニシ
罵テ屈セス、其死尤モ烈テリ、十月成功島ニ還リ忠臣ノ
廟ヲ祠リ甘輝ヲ以テ第一ト爲ス、曰吾早ク甘輝ノ言ニ
從ハ、此ニ及ハスト、○十四年五月、清ノ將軍達素、總督
李率泰、兩島ヲ攻ム、朱成功自ラ諸部ヲ勸シ海門ヲ扼シ、

令ラ諸將ニ傳ヘテ海ノ中流ニ碇シ、軍ヲ按シテ動カス、
清ノ船迄至ス、諸軍倉卒ニ命ヲ受ケ、敢テ先ツ發スルナ
シ、清ノ兵之ニ乘ス、副將陳堯策之ニ死ス、東風盛猛清ノ
船既ニ上流ヲ得、成功巨艦ヲ引テ之ヲ横撃ス、北人水ヲ
諳ンセス、眩暈シテ戦フヲ得ス、僵屍海ニ布キ大敗シ
テ退久、成功ノ世ヲ終ルマテ島ヲ窺フモ、ナシ、○十五
年、帝緬甸ニ在リ、朱成功江南ノ敗夜ヨリ、地感マリ軍孤
ナリ、帝ノ外ニ蒙塵シテ存亡未タ知ルヘカラシルヲ以
テ、姑ラク天祐天復ノ故事ニ倣ヒ、正朔ヲ維持シ、臺灣ヲ
取テ之ニ遷ラント議ス、該島周袤三千餘里、物産豐饒、

耘並耦シ、日用ノ需足ラサル所ナク、固ヨリ東南ノ一大聚
落ナリ、鄭芝龍嘗テ此ニ居リ久シカラスレテ去ル後チ
荷蘭人來リ其島ニ盤踞ス、諸將險遠ヲ難カリ冑テ決セ
ス、成功銳意之ヲ取ラント期ス、鹿耳門ニ至レハ則チ水
驟カニ漲ル一丈餘大小ノ戰艦橫縱畢ク入ル、荷蘭人大
ニ驚キ以テ天ヨリ下ルト爲ス、成功喜ンテ曰、此レ天ノ
孤ヲ哀ミテ之ヲ憐ニ弃テサルナリト、兵ヲ引テ岸ニ登
リ赤嵌城ニ克ツ、蘭人退テ王城ヲ保ス、○清主福臨歿ス、
是ヲ世祖トナス、第三子女曄位ヲ嗣キ、明年ヲ改メテ康
熙元年ト爲ス、十月、鄭芝龍ヲ柴市ニ棄シ、子孫ノ京ニ在

ル者ミナ之ヲ戮ス、○十二月、朱成功復タ王城ヲ攻ム、蘭
人乃チ降リ、諸土酋ミナ約束ヲ受ク、遂ニ臺灣ヲ改メテ
安平鎮ト爲シ、赤嵌城ヲ承天府ト爲シ、總テ東都ト曰フ、
法律ヲ作り學校ヲ興シ、丁庸ヲ計リ老幼ヲ養フ、臺人大
ニ集リ鄭氏遂ニ安シ、○十六年五月、延平郡王招討大將
軍朱成功臺灣ニ卒ス、年三十九、臺人其弟襲ヲ以テ講理
ト爲ス、六月、成功カ赴島ニ至ル、長子經位ヲ嗣ク、十月、師
ヲ帥井テ臺灣ニ往ク、黃昭襲ヲ奉シテ經ヲ拒ム、經昭ヲ
射テ之ヲ殪シ、遂ニ臺ニ入り、主謀ノ者ヲ殺シ餘ハ置テ
問ハス、襲ヲ待ツ一初ノ如シ、○十七年、清康熙
二年、帝填城ニ

殂ス、明太祖ヨリ此ニ至リ二十世、二百九十六年ニシテ
亡ス、朱經猶ホ正朔ヲ奉シテ永曆ト稱ス、始メ鄭泰潛カ
ニ黃昭ニ結テ、經ヲ拒キ事露ハル、經乃チ佯テ置酒シ、泰
ヲ迎ヘテ之ヲ縊殺ス、泰カ子纘カ弟鳴駿亡テ清ニ歸ス、
將士清ニ歸スル者多シ、是ニ於テ清主意ヲ南掠ニ銳ニ
シ、將士ヲレテ道ヲ分チ疾ク進マシム、經死士ヲ部分シ
テ之ヲ禦ク、衆寡敵セス、退テ銅山ヲ守ル、清ノ兵島ニ入
リ兩城ヲ墮チ、其地ヲ弃テ寶貨婦女ヲ收メテ北ス、是ヨ
リノ後親族兵將、大抵清ニ降ル、獨リ陳永華馮錫範等ア
リ、經カ臺ニ還ルニ及ヒ、事大小トナク悉ク永華ニ委ス、

永華政ヲ爲ス頗ル儒雅ヲ雜ヘ民ト休息ス、東都ヲ改メテ東
寧ト爲シ、諸將ニ土地ヲ分チ、菟裘ヲ修シ、西スル意ナキヲ示
ス、○二十三年清康熙八年春、清主人ヲ遣シ朱經ヲ招カシム、從ハ
フ、清モ亦敢テ兵ヲ加ヘス、經將ヲシテ嶋上ニ往來シテ互市
セシム、○二十七年清康熙十二年十一月、清ノ平西王吳三桂、雲南四
川貴州ニ據テ叛ス、○二十八年清康熙十三年三月、清ノ靖南王耿精
忠、福建ニ據テ亦叛シ、提督王進功等ニ將軍ノ官ヲ授ケ、勢威
頗ル振フ、使テ遣シ臺ニ入テ濟師ヲ請フ、四月、清ノ潮州ノ總
兵劉進忠城ヲ以テ精忠ニ降ル、精忠海澄ノ總兵趙得勝カ兵
ヲ調ス、得勝從ハス、將士ト議メ朱經ヲ奉ス、經陳永華ヲ以テ

留守總制ト爲シ、侍衛馮錫範、兵官陳繩武等ヲ率井、海ヲ渡テ
西ス、得勝ニ與明伯左都督ヲ授ク、經カ東ニ遷ルヨリ武ヲ偃
セ民ヲ息ヒ、兵甲鈍敝シ、船百ニ滿タス、軍萬ニ充タス、精忠頗
ル之ヲ易トル、經人ヲメ精忠ニ説カシムラク漳泉二府ヲ借
テ召募ヲ爲サント、精忠之ヲ難ス、是ニ於テ耿鄭交々惡シ、五
月、經同安ヲ取ル、清ノ守將張學堯降ル、精忠惧レ都尉王進ヲ
以テ泉州ヲ守ラシム、六月、王進功カ子藩錫、泉州ノ城守頼王
ヲ誘殺シ、遂ニ進ヲ逐テ經ニ納款ス、經乃チ泉州ニ入り、藩錫
ニ指揮使ヲ授ク、盡ク國事ヲ委ス、七月、清ノ兵潮州ヲ圍ム、精
忠救フ能ハス、守將劉進忠モ亦經ニ納款ス、經舟師ヲ遣テ之

ヲ援ヒ、進忠ヲ以テ定虜伯前提督ト爲ス、九月、精忠王進
ニ命シテ泉州ヲ取ラシム、十月、經將士ニ命シテ進ヲ塗
嶺ニ敗ル、吳三桂カ禮曹周文騏經ニ使シ、耿鄭ヲ平久○
二十九年清康熙十四年正月、耿精忠使ヲ朱經ニ遣シテ和ヲ議
ス、五月、右武衛劉國軒潮州ニ入り、左虎衛何祐及ヒ劉進
忠ノ兵數千人ト屬邑ノ未タ下ラサル者ヲ徇フ、清ノ平
南王尚可喜カ兵十餘萬、銳ヲ盡シテ來リ攻ム、相持スル
ヲ久レ國軒食盡キ退テ潮ヲ守ラシム、議ス、可喜駁騎
ヲ麾テ晨ニ柘カ軍ヲ鸞母山下ニ掩フ、祐身ヲ以テ旗ニ
先チ直チニ驍騎ヲ貫キテ其左右ニ出ツ、國軒之ニ繼キ、

大ニ清軍ヲ敗リ、奔ルヲ追フ、四十餘里、斬首二萬、捕虜七千、韓藉シテ死スル者山谷ニ徧滿ス、國軒威名南粵ニ振ス、六月、朱經諸將ヲ帥キテ漳州ノ黃芳度ヲ圍ム、芳度ハ清ノ海澂公梧ノ子ナリ、經ノ島ニ至ルニ方リ、陽ハニ經ノ命ヲ受ケ、陰カニ清ニ通ス、經覺テ急ニ之ヲ圍ム、十月、之ニ克ツ、芳度并ニ投シテ死ス、○三十年清康熙十五年二月、清ノ尚之信吳三桂ニ降ル之信ハ平南王可喜ノ子ナリ、三桂惠州ヲ朱經ニ讓ル、劉國軒入テ之ニ踞ス、九月、清ノ兵閩ニ入ル、耿精忠降ル、其守將馬成龍與化ヲ以テ經ニ歎ス、初ノ精忠鄭氏トカヲ併サン、トヲ思入、已ニシテ協

ハス、清其外ヲ撃チ、鄭其内ヲ撃ツ、前後跋蹙シテ卒ニ敗ニ至ル、○三十一年清康熙十六年正月、趙得勝何祐清ノ兵ヲ興化城下ニ拒ク、清ノ兵反間ヲ縱ツ、祐得勝カ清ニ貳アルヲ疑テ扶ケス、師潰エテ得勝自殺ス、興化遂ニ陥リ、泉漳二州潰ユ、朱經退テ島ニ入ル、六月、劉國軒惠州ヲ棄テ、島ニ入ル、經國事ヲ以テ國軒ニ委ス、○三十二年清康熙十七年二月、朱經劉國軒ニ中提督ヲ授ケ、帆ヲ揚ケテ鎮門ニ入リ、碧湖ニ壁シ、赤嶺ニ戰ハシム、清ノ總督郎廷相等兵ヲ漳上ニ按ス、泉福潮三州ノ兵後先來リ、援フ、國軒數戰シテミナ之ヲ敗リ、遂ニ平和漳平ヲ取り、海澂ヲ圍ム、○六月、清

主布政姚啓聖ヲ以テ總督ト爲シ、諸軍ヲ趣カシテ激ヲ
援ク、葛布山ニ次シ、帶水ヲ隔テ相望ムノミ、圍中食盡テ
城破ル、提督段應舉自經ス、清ノ兵死スル者甚ク衆シ、國
軒軍威益ク熾ンナリ、遂ニ長泰、同安ヲ取ル、七月、勝ニ乘
シテ泉州ヲ圍ム、八月、清兵ヲ五路ニ分テ期ヲ尅シテ泉
州ヲ援ク、九月、國軒二十一鎮ヲ師井テ清ノ兵ト龍虎山
ニ戰テ大敗シ、師五千ヲ亡テ、國軒乘ル所ノ馬ニ尾シ、河
ヲ泗テ遁ル、○此年、吳三桂病テ死ス、○三十四年清康熙
正月、清ノ水師提督萬正色、大ニ舟師ヲ會シテ島ヲ攻メ、
進テ海壇ニ逼ル、朱經左武衛林陞、左鎮朱天貴等ニ命シ

テ、之ヲ禦カシム、陞等清軍ノ衆キヲ畏レ、海壇ヲ棄テ、
退ク、海上ノ諸鎮多ク清ニ降ル、正色遂ニ兩島ヲ陷ル、經
諸將ヲ率井テ復テ臺灣ニ入ル、○三十五年清康熙正月、
延平郡王ノ世子朱經臺灣ニ率ス、經位ヲ嗣ク、十九年、明
ノ正朔ヲ奉シ、招討大將軍ノ印ヲ佩ヒテ世子ト稱ス、命
ヲ受ル所ナキナリ、長子克塽、本姓ハ李氏、經カ嬖妾林氏
之ヲ養フ、經知ラサルナリ、經カ西スルニ及テ、克塽ヲ監
國ト爲ス、克塽嚴毅頗ル、成切ニ倣フ、諸弟之ヲ畏ル、經カ
敗レテ東ニ還ルニ及テ、國ヲ以テ塽ニ付ス、是ニ至リ、經
卒シ、諸弟揚言シテ曰、克塽ハ吾カ骨肉ニ非ス、一旦志ヲ

得ハ吾屬遺類ナクント、經カ母董氏命シテ監國ノ印ヲ
收メ、克塽ヲ別室ニ幽シテ、次子克塽ヲ立ツ、克塽幼ニシ
テ髮初メテ額ヲ覆フ、劉國軒ニ武平侯、馮錫範ニ忠誠伯
ヲ授ク、八月、董氏卒ス、○三十七年、清康熙二十二年清萬正色ヲ
以テ陸路提督ト爲シ、施琅ヲ水師提督ト爲シ、大舉シテ
南侵ス、劉國軒精兵二萬ヲ督シテ澎湖ヲ守リ、林陞丘輝
等ヲシテ衆二萬ヲ約シ、鷓籠嶼ニ集テ大ニ戰フ、清ノ兵
利ラス、琅矢ニ中テ退キ、諸將ヲ集メテ軍令ヲ申ヘ、總
兵以下ミナ按スルニ失律ノ罪ヲ以テス、兵氣復タ振ス、
虎井嶼ヲ陷レ、乃チ師ニ誓ヒ、分テ八隊ト爲シ、琅自ラ一

隊ヲ統ヘ、中ニ居テ調度ス、國軒火矢噴筒ヲ發シ、燔焰怒
張ス、清兵銳ニ乘シテ夾撃シ、辰ヨリ午ニ至リ、兵氣益々
厲シ、國軒軍敗ル、林陞丘輝等ミナ戰死ス、大小ノ戰艦二
百餘艘燒亡ス、餘衆多ク清ニ降ル、國軒勢ノ敵セサルヲ知
テ、急ニ忝舸ニ乘シテ佚シ去ル、澎湖已ニ陷ル、臺灣大ニ
震ス、寧靖王術桂自ラ謂ラク、明家ノ龍種義辱スヘカラス
ト、乃チ冠服ヲ具ヘ、臺人ヲ招キ、從容トシテ別飲シ、投
縵シテ死ス、臺人爲ニ涕ヲ流ス、八月、琅舟軍ヲ統ヘテ鹿
耳門ニ至ル、國軒馮錫範何祐等克塽ヲ奉シテ迎ヘ降ル、
鄭氏永曆ノ正朔ヲ奉スルト二十年此ニ至リ、明曆全ク

盡久

歴史攬要卷之二十 大尾

帝由松ニ松或ルハ松 ○標下カ意麾下 欽案ノ魏忠賢ノ逆案殺宗

阮大鍼ニ鍼ノ字字書 征善征ハ賦ナリ 敝賦賦ハ兵索シ

薄海ニ薄ハ被ナリ書 重誅ヲ李自成幅員ノ幅ハ布帛規シ

宴行ナ行ハ樂 史詞ヲ進 火酒酒ヲル 黎園第九卷ニ

詳ナ 孫ル姪俗 姪ニ作 凌駟○闖賊無門 即チ馬ノ字馬元

兗有耳即チ阮ノ字阮 淑淑ナリ 善善 媳俗子ノ婦ヲ謂 峽峽折

巢封云々並ニ江蘇名封 帝聿金劍ニ諸史ルニ 濟然

鳥集ナ鳩ハ聚 鞭長左傳ニ鞭ノ長キト 淮陰ノ故事

信ヲ謂 蛟門名地 龍扛フ天子ノ輜重ヲ謂 貝革加清朝名道

歴史要 卷二十 ○叙文 一

レ道塗ニ疲弊スルナリ謂ニ欄衫ハ衣ノ通称唐

景紵欄衫ヲ以テ文廟文宣王ノ帝由榔○聿鉤書見エス曹

暉○倚角リテ其後ヨリ其足ヲ偏持シ角ハ前ニ當底定

衣ハ至石室此レ借リテ書庫ヲ謂フナリ威稜威ヲ稜

ト曰懔クニ動ナリ漢書李廣ノ傳搃刺ナ縦横跌宕ナリ

ハ過迄至ナリ迫緬甸南荒ノ天祐天復ノ故事天復ハ唐

ナリ天祐ハ昭宣帝ノ年号五代史ニ天復四年梁唐都ヲ

洛陽ニ遷シ改元シテ天祐ト曰フ李克用謂ヘラク天子

ヲ却シテ都ヲ遷スハ梁ナリ天祐ト云々深唐ヲ滅シ称ス

ヘカラスト乃チ仍ホ天復ト称スト云々深唐ヲ滅シ称ス

用復ト称ス天祐菟裘左傳ニ菟裘ニ營マシメ吾将ニ老ント

四年ト称ス天祐菟裘左傳ニ菟裘ニ營マシメ吾将ニ老ント

居ルヲ欲セス故ニ齋師瀟ハ益設騎張ルナリ弩ヲ饗母山

別ニ別邑ヲ營スト齋師瀟ハ益設騎張ルナリ弩ヲ饗母山

山ノ跋躑載チ其尾ニ寔ソク名○揚言大言シテ疾

フ書ニ作ル○火矢噴筒ノ火器綴環ルナリ

言ニ作ル○火矢噴筒ノ火器綴環ルナリ

言ニ作ル○火矢噴筒ノ火器綴環ルナリ

言ニ作ル○火矢噴筒ノ火器綴環ルナリ

言ニ作ル○火矢噴筒ノ火器綴環ルナリ

言ニ作ル○火矢噴筒ノ火器綴環ルナリ

明治十年十二月八日版權免許
同十一年五月出版

編輯人

東京府士族
原田由己

書

出版人

東京平民
篠崎戈助
宿所第一大區六小區
下横町七番地

出版人

東京平民
岩本三二一
宿所第二大區三小區
芝口三丁目十一番地

肆

出版人

東京平民
瀧澤義吉
宿所第三大區九小區
麹町十三丁目九番地

